

■「静」なる奈良の生活文化

公益社団法人奈良まちづくりセンター理事 神野 武美

1. 外から見た奈良

白樺派の文豪 志賀直哉（1883～1971）は1925年から1938年まで13年間奈良に居住し、自らが理想とする自宅を建てたが、奈良を「総ては不思議なほど不相變であった」（『早春の旅』）と評している。志賀は、1925年に京都から自然の美しさを求めて奈良市幸町の借家に転居。3年後の28年、自ら設計した住宅を京都の数寄屋大工に建てさせた。その家は、「溺れないで愛しよう」という健康的な家庭生活を目論み、夫人や3人の子供たちの部屋を日当たりのよい南に設け、部屋はそれぞれ独立しているが、開放的な白樺派の個人主義、理想主義が現れていると言われている。志賀は、この家で『暗夜行路』を書き上げている。

「何か物足りぬ」と感じた志賀直哉

志賀が奈良に移り住んだのは、東洋の古美術に興味を持つとともに、その「静」なる雰囲気魅かれたからだ。高畑町一带は文人や画家たちが集まり住んだところでもある。しかし、その一方で「男の兒を育てるには何か物足りぬものを感じ」、10年後には東京に引っ越し、それでも「奈良に帰りたい」という思いを持ちながら、東京に新居を建てる費用をねん出するため「旧居」を地元の資産家に売却せざるを得なかったという。（『早春の旅』から）。

志賀が奈良に遺したといわれる言葉に「奈良に旨いものなし」がある。一般市民の多くも「大仏商法」「お店が早く締まる」などマイナスイメージを抱いている。夜の街に期待する観光客にとっては面白くない街なので、「日帰り観光」で済ませ、奈良県全体の宿泊者数は全国一少ない。「物足りぬもの」とは、何かアピールするものを見



志賀直哉旧居の外観＝奈良市高畑町



「写真で見る日本」掲載の西大寺の大茶盛式

つけて競争に勝ち抜こう、といった積極性が感じられない土地柄ということかもしれない。

ただ、そのことは奈良以外の人達からも求められていないらしい。1956年5月初版の「写真で見る日本」（日本文化社）というシリーズ物の写真集がある。その1巻は「奈良・三重」。最初の頁の「奈良県概要」の記述が面白い。「……県民の生活からみてもこの県には大きな変化は期待できなく、また日本全国の人々もこの県に対しては、変化することを望まず、古い伝統をもつ姿を静かにしておきたいと考えていることでしょう。」とある。

お寺や神社が多く、それらが伝統行事を長年続け、県外の観光客もそれを「見に来る」ことが多いせいかもしれない。毎年3月1～15日の東大寺二月堂の「お水取り（修二会）」は西暦752年以来途絶えたことがない。毎年12月17日春日大社の摂社若宮神社の「春日若宮おん祭り」も1136年から続き、西大寺の大茶盛式も開催日こそ変

Takeyoshi JINNO

公益社団法人奈良まちづくりセンター理事、日本居住福祉学会理事。
〔著者紹介〕（略歴）1952年9月、横浜市生まれ、元朝日新聞記者。著書に『情報公開一國と自治体の現場から』（花伝社、1996年）、『居住福祉資源の経済学』（東信堂、2009年）。共著に『居住福祉産業への挑戦』（東信堂、2013年）など。

わった（現在4月第2日曜と前日、10月第2日曜）ものの、鎌倉時代の1239年1月16日、僧の叡尊が八幡神社に献茶した際に余服を一般僧にふるまったという故事を起源に恒例の行事となったと伝えられている。

市民が担い続ける宗教行事、民俗行事

こうした行事には市民が主体的に関わっていることを忘れてはならない。6月の率川神社「三枝祭り」は、元は地味な行事だったが、地元の映画館主で奈良市観光協会会長も務めた谷井友三郎が、奉祝会長となった縁で1953年6月から「ゆりまつり」と称して7人の乙女が渡御を行う美しく華やかなまつりになり、観光客の注目を浴びるようになった（『谷井友三郎伝』より）。毎年2月5日の川上村の「朝拝式」は、吉野の山深いこの地で暗殺された後南朝の末裔を偲び、村民が1458年から550年以上も続けてきた行事である。県内にこうした例は枚挙に暇がない。町会などの小さな自治単位で連綿と続けられてきた特徴があり、多くの人が感じる「奈良の奥深さ」の源泉になっているといえるだろう。



後南朝末裔の自天王の武具をご神体として崇める朝拝式＝川上村の金剛寺

伝説に満ちた「奥深さ」

奈良県内の街角で目に付いたものについて「これ何？」とうっかり小父さんたちに声をかけると、その由来から歴史上の変遷、現況まで「よもやま話」を滔々と聞かされることがある。例えば、2017年3月、菅原道真を輩出した菅原氏ゆかりの菅原神社（奈良市）の盆梅展を鑑賞に立ち寄り、お手伝いをしていたボランティアの男性に「蛙股池って昔は菅原池だったそうですが…」と尋ねると、「そう、日本最古のため池です。今でも水利組合があり私たちの水田に水を引いています」と自慢話を始めた。「蛙股池」とは、近鉄学園前駅に近い新興住宅地にある池で、筆者は池の近所に住みながら、そんな古い歴史があるとは知らなかった。

数多くの都市伝説も伝えられている。例えば、昔、三作という少年が習字の勉強中に一匹の鹿が書いた紙をくわえたので文鎮を投げつけると打ち所が悪かったのか鹿

が死んでしまった。神様の使いの鹿を殺せば「石子詰め」。つまり死んだ鹿とともに生き埋めにされる死刑である。近松門左衛門の浄瑠璃「十三鐘」は、この三作の母親が子の霊を弔うためについた鐘の話の題材にしており、興福寺の南側には「傳説三作石子詰之跡」と書かれたお堂がある。落語の「鹿政談」は、「奈良の早起き」が題材である。朝、起きると家の前でシカが死んでいる。このままではどんなお咎めを受けるかもしれないので、そっと隣に運ぶ。次に起きた隣家の人はあわてて死骸を別の家の前に運ぶ。朝寝をしていたら、どんな目にあうか分からない、という話である。

奈良時代、藤原広嗣の怨霊によって玄昉という僧の読経中に雷が落ちてその体が飛び散り、頭が落ちたところに「頭塔」が作られ、腕が落ちたところの地名が「肘塚」になったとか。奈良女子大正門近くの古道具店の2階に窓が無いのは、奈良町奉行所（現奈良女子大構内）のお白洲を覗けないようにしたため（位置関係から信憑性は薄い）——といった実在するモノにまつわる伝説も数多い。

奈良茶湯の伝統と珠光茶会

奈良に根付く生活文化といえば茶道である。奈良県の東部や南部の山間部は古くから茶の産地であり、茶粥などにも使う生活茶の「日干番茶」「釜炒り茶」の生産が山村地域で行われている。奈良市の旧市街「奈良町」には茶道の先生の看板を数多く見かけ、それに関連するようには和菓子店が目立つ。

茶道は、表・裏・武者小路の三千家の家元のいる京都や千利休の出身地の堺のイメージが強いが、西大寺の大茶盛り式は鎌倉時代に起源があり、茶道各流派となる「わび茶」の創始者は、奈良・称名寺の僧だった村田珠光（1422～1502）である。

16、17世紀には、小堀遠州、片桐石州、織田有楽など大和（奈良県）に所領を持った大名茶人が活躍し、石州流や有楽流などはそれを受け継いだものである。奈良国立博物館の庭には「大和三茶室」の一つ「八窓庵」が現



奈良国立博物館の庭にある八窓庵



築100年の町家も会場の一つとなった珠光茶会

存し保存されている。奈良の漆問屋松屋源三郎家の久政、久好、久重の3代にわたる最古の茶会記『松屋会記』（1533～1650年）の転写本も残されている。

春日大社、東大寺、薬師寺など8社寺と三千家など7流派が参加し、各社寺や町家などの会場で一般参加者も茶の湯を楽しめる「珠光茶会」が2014年から毎年2月に開かれている。珠光茶会自体の歴史は新しいが、村田珠光以来、数々の茶人を輩出したの「奈良茶湯」の伝統が、流派を超えた交流を生んだともいえるだろう。

2. 奈良町モノ語り調査

奈良まちづくりセンターは2016年度、文化庁の助成を受けて「奈良町モノ語り調査」を行った。主に調査したのは、「ならまち」の中心部にある戦前米穀商を営んできた旧家の蔵（松山家）、奈良町と農村の境界域である京終地区きょうしゅうの地域行事の「春日講」「当夜座講（花切り祭）」とうやざこうを中心となって続けてきた大正時代創業の酒類小売店であり先祖代々農業をしてきた家（萩原家）、新しく引っ越してきた住民が、かつて住んでいた住民が残したモノを大切にしている同じ京終地区の町家（吉岡家＝旧藤井家）の3カ所である。建物や美術品、古文書を調べるのではなく、町家の収蔵物から、奈良町の生活文化に結びついた民俗資料や民衆史の痕跡を探り出すのが目的である。これまで農村部の民俗資料の調査は行われてきたが、町場での調査は町家や寺社などの建築物が中心であった。行政が多くの費用をかけて修理・保存した建物でも、中に入ると生活に使われた道具などがほとんど無く生活感



葬儀で使われた食器類は箱に収められ、香典袋や小川氏の子どものころの手習いの反故紙などが詰められていた（上）。弔辞の表紙と1枚目（右）

に乏しいがらんとした空間だけが展示されている例も少なくない。そこで、「ガラクタ」も含めて町家に残されたモノを中心に生活感のあるものを調べたのがこの調査である。

2017年度も、地域自治の拠点である「会所」を中心に「モノ語り調査」を継続中であるが、初年度の調査で見つけたモノの中には、太平洋戦争下の市民生活や犠牲者の記憶を呼び覚ませるモノや、奈良の伝統的な生活文化の豊かさ、つまり「奥深さ」に直結したモノもあった。

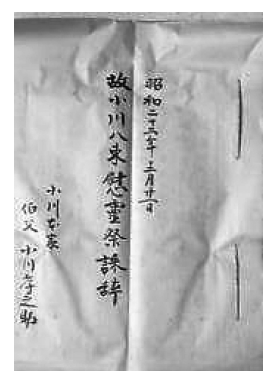
松山家の暮らし

蔵に大切にしまわれていた戦没医師の遺品

松山家の蔵からは、松山家の二女と結婚しわずか1年2カ月の新婚生活の後、応召しビルマで戦死した医師、小川八束の遺品、例えば医学書や論文抜粋、妻や親族への手紙、それに戦後（1947年）行われた葬儀で伯父が読み上げた誄辞（弔辞）るいじなどが数多く発見された。葬儀で使われた食器類は、妻の手によって、香典袋や八束自身の手習いの反故紙などに包まれ、遺品の靴下などとともに丁寧に箱詰めされていた。松山家の長男、谷井友三郎の長男、吉岡家の元住民である藤井家の長男なども戦争の犠牲になった。奈良町は戦災に遭わなかったが、多く



国防婦人会の幟や旗も蔵に収められていた

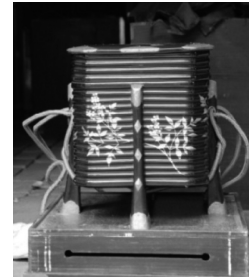


の戦死者が出ている。

武者人形や雛人形

松山家は中心部の西新屋町で江戸時代から太平洋戦争期まで米穀問屋を営み、奈良市内にあった陸軍歩兵38連隊にも米を納入し県内一の米屋と言われたが、戦時中の統制と戦後の米の配給制度の実施に伴い廃業した。娘の嫁ぎ先から養子として入った今の当主は市内の別の場所に住んでおり、今回調査した蔵のある建物は現在、豆腐料理店や居酒屋、カフェなどに利用され、登録有形文化財に選定されている。蔵は4つあったが、1つは居酒屋になり、もう1つはFMラジオ局に使われていたが現在は空き家。今回は、数十年間も開けられなかった2つの蔵のうちの1つを調査し75点以上の写真を撮った。

松山家はかつて広大な水田も所有し、米の収穫後に使われる明治期の唐箕^{とうみ}が2つ蔵の外に置かれていた。蔵で最初に目についたのが、何冊もの医学書であった。箱の中から「誄辞」や香典袋が出て来て医学書の持ち主がわかった。米穀商として使った滑車、そろばん、秤、結界などがあり、婚礼などのハレの行事に使われたと思われる黒漆に南天の蒔絵のついた行器などがあった。子どもために買い集めたと思われる武者人形、雛人形やそれに付属するミニチュアの箆笥、鏡台、重箱、寝具、台所



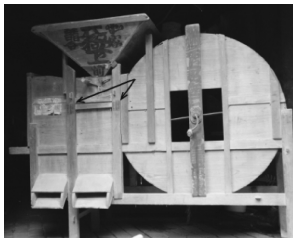
行器（ほっかい）



テイチク製蓄音器「NANKO PHONE」



蓄音器の蓋にある大楠公マーク



唐箕



結界



小火鉢（煙草盆）



武者人形



雛人形に付属したカヤマキや布団



御殿雛（上）、当時の生活を物語る台所道具（下）など生活用具のミニチュアも



セットなどもあった。テイチクという、古賀政男らを擁した非外資系のレコード会社で奈良市南肘塚町に本社があった。1931年創業だが、蓄音器を製造していたという記録は社史にも残っていない。

萩原家の暮らし

萩原家のある北京終町は、平城京外京の南端を画した五条東大路の遺構の道沿いにあり、当主の萩原正弘氏（1936年生まれ）が檀家の寺で調べたところによると、萩原家は6代前の19世紀初頭までたどることができる。元々農家だが、1914年に食料品や酒類の販売業も始めた。萩原家の町家は奥行きが50メートルもあり、改造が何度も重ねられ築年代は不明だが、軒先にガス管が残り、ガス灯も現存することから電灯線が通じる以前の建物と思われる。所在地は、江戸時代に神鹿と呼ばれたシカが周辺農地を荒らすのを防ぐために奈良町全体を囲んだ「鹿

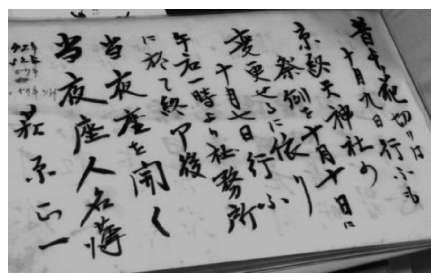
垣」の内側にあり、奈良町奉行所の管内であった。その一方、現在JR桜井線の南側に広がるかつての水田地帯には農地を所有し、ため池などの水利権を管理する「京終村番水」という組織に参加していた。

都市と農村の両方の性格を持つ地域の文化

地元の飛鳥神社（京終天神社）の境内には、「基本金壱阡円」と刻まれた石柱が2基あり、それぞれ「南北京終町」「京終村方」と記されており、都市と農村の両方の性



当夜座講は、飛鳥神社でお祓い（上）後、当屋の床の間にご神体を安置する（下）



当夜座講のきまり事や講員名簿などを記載する「萬覚帳」



「春日講」の独特の飾りを作る講員



「春日講」の床の間の飾り

格を持った地域であることがわかる。萩原家は今も同神社の氏子総代を務め、「当夜座講（花切り祭り）」（10月上旬）「春日講」（1月21日）という2つの地域行事の講員でもある。講員は両講とも同じ顔ぶれで現在6名。大正10（1921）年には12名もいた。先祖代々は2名だけで顔ぶれは変遷している。いずれの講も五穀豊穡を願うものだが、当夜座講は、飛鳥神社の御神体や菅原道真像の掛け軸を1年間管理してきた当屋から次の当屋に引き継ぐ儀式であり、同時に梅の花の造花を飛鳥神社の社殿に飾る。その1週間後に京終地区全体の秋祭り（飛鳥神社の祭礼）が開催される。春日講は、当夜座講と同じ当屋の家で行われるが、床の間には「春日鹿曼茶羅」を掛けて、青竹と杉の葉を梯子状に組み合わせた独特の飾りつけをする。祭事後は、春日大社の若宮社を全員で参拝し、元和3（1617）年に「京終町春日講中」が奉納した石燈籠にも参拝するのが習わしである。（元号を記したものは資料によるものである）

地域の行事も家事も悉く記録し調査する当主

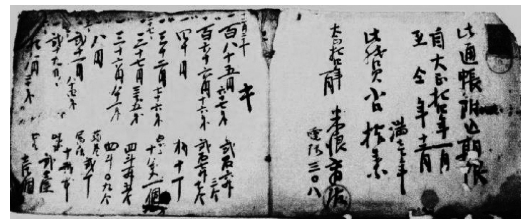
萩原家の特筆すべきことは当主の萩原正弘氏が、自分の家や飛鳥神社、地域の歴史遺産などを丁寧に記録してきたことである。家業の酒店や農業、副業としてきたため池を利用した養魚業、飛鳥神社関係の記録や風習など



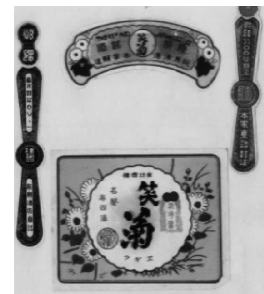
清酒を瓶詰し、栓をするための打栓機



戦前期のテイチュとタカシマヤのレコード（上）



大正14年の期限1年間の掛け売りの通帳（付帳）



萩原商店には、「笑菊」などの独自ブランドもあった



萩原家にあった手回し式蓄音機と蓋中央部にある商標

を記録するだけでなく、「福寺池」というため池があった場所にかつて存在した古代寺院「福寺」の瓦も、1970年に埋め立てられる前の福寺池から古代瓦を採取し、自宅に保管していたものである。元興寺文化財研究所が近年、JR京終駅近くのテイチク本社跡に移転し、地元住民との連携による文化財調査に乗り出した結果、保管していた古代瓦が、「幻」と呼ばれていた福寺の存在を考古学的に証明するものとなった。

酒店の関係では、戦前期から販売してきた種類の銘柄のラベルや封緘紙などをすべて保存している。萩原商店では、造り酒屋から生酒を四斗樽で買い、一升瓶に詰めて火入れしたものを販売していた。清酒の火入れに使った容器や王冠を被せる打栓機は今も残されている。レコードも、地元のテイチクをはじめ浪曲などが入力された23枚をリスト付きで、また、破損はしているが手回し式の蓄音器（製造元 GkufuPhone）もある。

農業や養漁業関係では、ため池に関する資料が写真で記録されている。福寺池などのため池は1970年に埋め立てられ、その後は宅地や工場用地になったが、冬場の「ジャコトリ」の記録が、もう一つの「よろず覚帳」に記入されている。先々代の当主萩原徳松は、コイやフナなどをため池を利用して養殖していた。厳冬期には池の水を抜き、近所の農家に手伝ってもらって魚を採り、昭和44（1969）年1月には約20万円の売り上げがあったと記録されている。ため池が埋め立てられたため、漁具類などはすでに廃棄されたが、萩原氏は、それらが廃棄される前に写真を撮って記録していた。例えば、マッチの軸のような形をした「樋の

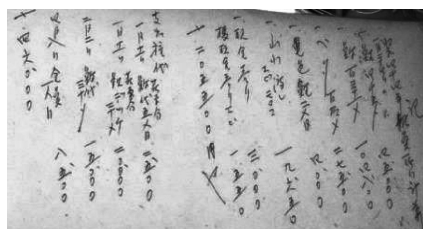
簀」は、棒の先の竹籠状のものをため池の排水口に差し込み、水は流すが魚は外に逃がさないための道具である。ほかにも、モンドリや魚籠などの写真もある。

吉岡家（旧藤井家）から見える暮らしと歴史

吉岡家住宅は、萩原家から旧五条東大路をはさんですぐ北側にある。1935年ごろの町家であり、2016年に登録有形文化財に選ばれた。元々住んでいたのは種子商と香具師の元締めを兼ねていた藤井家。戦後奈良の観光に大きな足跡を遺した映画館主で奈良市観光協会長を務めた谷井友三郎（1901～1979）はこの場所で生まれ、谷井家に養子に入った。登記簿によると現存する建物は友三郎の兄駒治郎が建てた。2010年6月に吉岡家が購入するまで10年以上空き家であった。一時不動産業者の所有になったが、地元京終地区在住の作家、寮美千子氏がブログで「更地にするな」の呼びかけに関東在住だった吉岡卓也、幸子夫妻が応え2012年から居住している。

新しい住民が保存する元住民の記憶

藤井家が使っていた家財道具などが母屋に大量に残されていたため、吉岡夫妻はそれらを保存することにした。針箱や鏡台、神棚、食器などとともに、木の棒4本が見つかり、調べてみると、それらは上棟式などで飾られる「幣串」であった。その1本目は「昭和10（1935）年8月3日」の記述があり、藤井駒治郎が建てた現在の家と考えられる。2本目以降はいずれも谷井友三郎が施主である。2本目は展示施設「観光と大和歴史館」（1939年）、3



「ジャコトリ（雑魚取り）」の収支も記帳した、もう一つの「よろず覚帳」（上）と、その表紙（左）。作成された期日は昭和43（1968）年10月である



今は埋め立てられた農業用ため池「福寺池」（1969年3月26日撮影）。福寺という古代寺院があったらしい

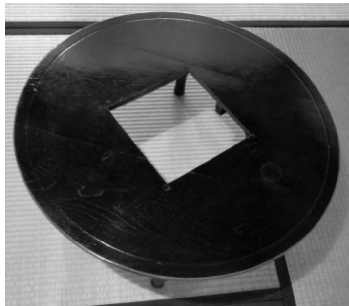


男性が持つのが「樋の簀」。萩原正弘氏が1987年ごろ撮影



幣串は、右から（「」内は表と裏の記述）

- ①表「祝上棟式 藤井駒治郎」裏「昭和拾年八月三日」
- ②表「祝上棟式 観光と大和歴史館」裏「昭和十四年七月二十二日」
- ③表「祝上棟式 施主友楽座」裏「昭和二十一年八月十一日 藤井殿」
- ④表「上棟式 奈良映画劇場」裏「昭和二十四年七月十三日 施主谷井友三郎」



円卓



観光大和歴史館の上棟式。後ろに幣串が並ぶ（県立図書情報館デジタルアーカイブ）



使い込まれた米櫃



鏡台



水屋に残された食器類



香具師の焼印



針箱



奈良遷都1250年祭の時代行列で輿に乗る谷井友三郎（『奈良遷都千二百五十年祭記念記録写真集』大和タイムス社、1960年3月より）

本日は戦後すぐに建てた劇場兼映画館「友楽座」(1946年)、4本日は映画館の「奈良映画劇場」(1949年)。友三郎は戦前から、全国各地で開かれた数々の博覧会を企画運営したプロデューサーの才能を生かし、1946年12月に私費を投じ「春日若宮おん祭り」の時代行列を復活させたり、名優長谷川一夫が扮する聖武天皇を登場させて奈良遷都1250年祭(1960年)を盛り上げたり、他にも数々の伝統行事を華やかなものにプロデュースしたりした人物である。長男を戦争で失った友三郎は、8月15日に戦没者を慰霊する奈良大文字焼きの保存会会長も務めた。死後、『谷井友三郎伝』という560頁もの大著の伝記が編纂されている。

母屋に残されていたモノの中には、戦時中のはがきや写真、親類の戦死と特進を伝える新聞の切り抜きを載せたアルバムもあった。駒治郎の長男と思しき人物の写真には「この写真は最後のものですから永久祈念の為大切に保存願います」と添え書きされていた。

しかし、戦争の記憶だけでなく、戦後あれだけ活躍した友三郎が興した映画館も映画の斜陽のなかで跡形もなくなり、奈良の住民の間でもその記憶も消えかかっている。

3. 過去からの遺産を活かし文化を活性化する

奈良県内では、家々に残された文化財や記録、民具などを市民の手で遺そうという動きが活発である。五條市農村部にある登録有形文化財「藤岡家住宅」では、地元の市民と関東在住の当主がNPO法人「うちの館」を設立し、建物の修理・保存だけでなく、内蔵やつし二階に残された大量の文物の由来を調査し続けている。現当主藤岡宇太郎氏の祖父長和(1888～1966)は、3県の官選知事を務めた官僚であり俳人でもあり、与謝野鉄幹、晶子夫妻、高浜虚子など多くの文化人と交流した。うちの館では、手紙や短冊、扁額だけでなく、昔の教科書や生活用具類を少しずつ整理し展示している。

城下町の町並みが残り、「薬売り」の町でもある高取町では、2007年から毎年3月に「町家の雛めぐり」を催し、例年約5万人が来訪する。3月の1か月間の毎日、約100軒の町家、住宅、商店などが自前の雛人形を座敷や玄関先に展示する。今も生活している伝統的な町家の中を見る良い機会でもある。展示される雛人形は江戸時代のもあれば、戦後の高度成長期に買ってきたものもあるが、高齢化が進み女兒がいない家の蔵や天井裏に眠っていたものを「何十年ぶり」かにひっぱり出してきたものが大半である。その約半数には、雛人形をめぐるその家族のエピソードを書いた「雛物語」の色紙が添えられている。来訪者と住民がそれをネタに会話する仕掛けであるが、会話が成り立つのも、この町の歴史や伝統について住民自身がよく知っているからである。

現代は「経済成長」が重視されるが、モノが溢れて廃



藤岡家住宅の内蔵に収められた民具類



「町家の雛めぐり」の一場面

棄物が増えたり、雇用や享楽を求めて大都会に人口が集中し窮屈な住居に住まわざるをえなかったり、激しい経済競争に勝ち抜くことに神経をすり減らしたり、購入と廃棄を繰り返す消費生活を強いられたりする状況が、市民の幸福度を高めているとは到底言えない。

市場競争の原理より歴史的、文化的な蓄積を大切にす
る奈良の静かな暮らし方に価値を見出すべきなのではないか。蔵の奥や天井裏に仕舞われた家財道具は、すでに市場から退場した時代遅れの無価値のものに見えるかもしれないが、それらが使われた時代の文化や歴史を知
ることは大きな蓄積であり、決して無駄なものではない。

本稿は、第69回大会(於:奈良女子大学)における教育講演「奈良のまちのくらしの「深さ」」の内容をまとめたものである。

【参考資料】

- ・奈良まちづくりセンター発行「地域創造」55号、2017年5月、1～44頁
- ・地域研究会「俚志」発行「さとびごころ」30号、2017年7月、特集「奈良とお茶」、3～11頁
- ・特定非営利活動法人うちの館『藤岡家住宅 修復と活用の記録』(発売:京阪奈情報教育出版)2015年2月
- ・天の川実行委員会『高取・町家の雛物語』(発売:京阪奈情報教育出版発売)2015年3月

日本家政学会誌68-11に掲載されています